天璋院篤姫

下

宮尾登美子

天璋院篤姫

下

宮尾登美子

講談社

天璋院篤姫（てんしょういんあつひめ） 下
昭和五十九年九月 十 日 第一刷発行
昭和六十年一月二十一日 第八刷発行

著者——宮尾登美子
© Tomiko Miyao 1984, Printed in Japan

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目三十三 郵便番号二一二 電話東京〇三—九四五—二一一一 振替東京八—一九三〇
印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社
定価——一二〇〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200561-1(0)（文1）

天璋院篤姫　下　目次

継嗣　承前　5
降嫁　54
動乱　173
余生　243
書き終えて　281

装画　加山又造

カバー画「春秋波濤」（東京国立近代美術館所蔵）より

表紙・見返し・扉画「雪・月・花」の「雪」より

装幀　中島かほる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

天璋院篤姫（てんしょういんあつひめ）　下

継嗣承前

継嗣の決定は、ハリスの通商条約と並んで目下の重要急務だが、それにはひとつひとつ手続きを踏まねばならず、まず老中に、次いで三家、溜之間詰の諸大名に、そして朝廷に奏上、最後に諸国総大名と一般市民に、という順になる。

一橋派の巻き返し運動は、この一番最後の安政五年六月十八日までに行なわねばならず、大名とその腹心部下の活動は活発になって、幾島もそわそわしているのを篤姫は横目で眺めているのであった。

篤姫はそれよりも、あの四月二十四日の突然のおわたりの夜、いつになく淋しい笑顔を見せてあとあとのいい置きをした家定の姿が目に灼きついており、以来、おわたりを待つ思いしきりなのに、いっこうにその沙汰はなかった。

おわたりの翌日には多紀元堅を呼んで病状を聞き、

「おみ足が腫れておいで遊ばすようにお見受けしたが」

といったが、元堅は、

「脚気は上さまのご持病にて、季節の変り目にはいつもぶり返されます。むろんお薬もきこしめし

ておいで遊ばします」

といい、薬ばかりでなく昨今は灸もおすすめ申上げているが、これはあまりお好みにはなりませぬご様子にて、という返答であった。

歴代将軍には灸師がついており、健康保持のため定期的に灸の療治をする習わしで、そのため将軍には、糸をひけば背中が左右に割れるお灸お召しという独特の着物がある。

幕府は手順どおり三家と親藩大名の重立ったものに六月一日、井伊直弼から将軍継嗣問題の決定を見たという発表をしたが、それは「徳川家血統のなかより」というだけで、名前は披露しなかった。慶福の名は朝廷奏上後公表する予定で、これは両派のいさかいを激化させないためでもあったろう。

この頃から、五月に長崎出島に上陸したコレラが東海道筋を攻め上って来、江戸市中はさんたんたる状態を呈したが、日本初の流行であったため対策もほとんど知られておらず、魚を食べるとたちまちコレラになる、などの流言が拡がり、魚屋料理屋は軒なみつぶれるという混乱で卵野菜類がとほうもなく高騰した。

朝廷奏上の使者は六月二日に江戸を発ち、朝廷よりの先例どおり、「目出度く思し召す」のお言葉を頂いて戻れば十八日には公式発表となるはずだったが、ハリスが突然横浜の小柴沖にあらわれて通商条約の調印を迫り、日程はすっかり狂って継嗣の名前発表も日のべとなってしまうのである。

幕府のあわてふためきようは奥にいてもよく判り、篤姫は家定を案じることひとかたならぬものがあった。

息災でこの難局に当られておいで遊ばすならよいが、と祈るような気持でひたすらおわたりを待っている。

ハリスのいいぶんは、英仏二国が清国に大勝し、その余勢を駆って日本に通商条約を迫るのは目

に見えており、その際、アメリカの示した条約の内容よりもはるかに苛酷な要求をするだろうという威嚇をこめた巧みなもので、それを聞いた下田奉行井上清直と目付岩瀬忠震はただちに大老に報告した。

幕府は江戸城中で会議を重ねたが、勅許を得ないうちに調印するべきでないという説は、いまにも米英仏と開戦になるやも知れぬという恐怖のもとに次第にかげがうすくなり、ついに六月十九日、アメリカ軍艦ポーハタン艦上において、ハリスと井上清直、岩瀬忠震とのあいだで調印されたのであった。

当日は礼砲二十一発が江戸湾の水にひびき、市民はふるえおののいたといわれるが、この騒ぎのなかでも、篤姫には家定の動静が判らなかった。

毎朝の仏間の礼拝も、四月末のおわたりの翌日から途絶えており、多紀元堅をふたたび召してもいつもあいにく非番の日であったりし、また幾島の許に届く密書もこのところひんぱんで、そのたびに、「必ずやご老公の巻き返しが功を奏するようでございます」

と報告があったが、篤姫は家定の様子と、それにもうひとつ、継嗣発表の際、家定が自分に話した、

「若き慶福を助けて御台が執務に当るように」

という構想の反響を知りたい思いもある。

六月一日に大老から三家と溜之間詰の大名に「徳川家血統のなかより」と発表したとき、その問題を大老はどのように告げたか、それをいまいちばん聞きたかったが、聞く手立てはなかった。

ただ、条約調印が終ったあと、六月二十五日に継嗣の名をひろく公表するという知らせはあり、両派ともその日までを緊張して過しているという状況だったが、滝山など悠然と構えていたのはよほどの自信か、と篤姫は思った。

前日の二十四日、松平春嶽は最後の阻止とばかり井伊直弼の藩邸に押しかけ、登城しようとする直弼のたもとを摑んで強く、条約調印と継嗣の件をなじったといわれている。

振り切って登城した直弼は、またもや登城日でもないのに押しかけ登城を行なった水戸斉昭、慶篤の父子、尾張の慶恕の三人にはげしく面詰され、そこへ直弼のあとを追って登城して来た松平春嶽も割り込もうとするのを、かろうじて、

「越前どのは家格が違う故にご同席まかりなりませぬ」

と拒んだそうであった。

この日は三卿の定例登城日でもあり、一橋慶喜も直弼に面会を求め、条約調印についてきびしく意見をぶっつけたという。

この日城内騒々しく、警備の武士を日頃の倍にも増やして警戒に当ったが、こういう騒動の様子が大奥へ知らされるのはいつもほとぼりのさめた頃であった。

六月二十五日、幕府は諸大名に総登城を命じ、公式に将軍継嗣は徳川慶福に決定した旨を告げた。現将軍が幼少の頃からずっとくすぶりつづけ、外交問題と重なって最近とみに紛糾していた次期将軍もこれで決定したわけで、一橋派の落胆ははた目にもはっきりと判るほどであったという。

西郷からの密書にも、紀州派を指して「逆党」とあり「奸計」とあり、自分たちを「忠直正論」としているのを、幾島はもっとものいい分だとし、公式発表のあった夜は篤姫のもとにも顔を出さず、自室で何やら書き綴っているらしかった。

篤姫の思うはひたすら家定の上であって、昨年は六月十六日のご嘉祥の日、お目見え以上を御座の間に集め、白木の三方に載せた紅白のひねり餅を将軍手ずから下される催しがあり、その折、うやうやしく戴こうとする女中の手から、末座のお坊主が飛んで来てさっとかすめ取るなどの一幕もあって大笑いしたことなども思い出すと、今年は「ご用繁多」の将軍のお成りもないさびしさをし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

みじみ感じるのであった。
それに気がかりなのは、御台みずから将軍執務を助けよという家定の命令がどこまで通じたのやら、継嗣の公表はただ慶福の名を告げただけ、と聞くとそこに一点ひっかかり、聞いてみる手立ては、と思ううち、七月の土用が近づく頃、梅野井から、
「お人払いを」
という折入っての話があった。
それによると、家定は慶福の名を井伊直弼に明かしたあとで、
「予も身体虚弱故にそろそろ退隠を考えておる。ついては、慶福が成長の暁まで、御台を表の執務に加え、万事につけ指図を仰ぐように、」
とねんごろに頼んだそうで、そのとき大老は承りました、というしかとした返答をしたにもかかわらず、公表の際には御台所の名は全く口にしなかったそうであった。
大老という役は、ときに将軍代理をも兼ね、専断の特権を与えられてもいるが、それだけに家定に代っての御台所の出現は目の上のこぶと感じられたものであろう。
よしんばそうでなくとも、女の身で政務に携わることなど、徳川幕府には前例のないことだったから、ひそかに家定の意を斥ける思いもあったかも知れなかった。
篤姫は、梅野井の話を聞いたとき、先ず不審に思ったのは、何故そのような極秘事項を梅野井が知っているかということで、それを糺すと、
「上さまがこのことをいたく残念に思し召しておいでの由、お付きのお茶坊主に洩らしたのを、私また聞きいたしましたものでございます」
と将軍付きだけに梅野井は自信を以ていう。
この大奥というところは、毒入りの食べ物のきびしい詮議も通用しないような謎の部分もあるか

と思えば、家定との夜の寝間の話もすぐぱっと拡がる不思議な部分もある、と篤姫は思い、そして梅野井の話はおそらく真実であろうと感じた。

家定が決して暗愚でないことは篤姫はよく理解しており、それは前例のない御台所の政務補佐というかたちを考え出したことでも証明されると思うけれど、大老になりたてで軒昂たる意気の井伊直弼にすれば、

「上さまは何を血迷われたか。我ら幕閣があまた控え居るのに、女性の力を借りるとはいやはや言語道断」

と内心思ったのではなかろうか。

なお、さらに、

「かねてより聞いていたれど、御台所に鼻毛を抜かれるほど上さまは愚かにおわすか、」

と呆れ、その命令は即座に聞き捨てるつもりだったのではなかったかと篤姫は思った。

梅野井の去ったあと、篤姫は井伊直弼に対する怒りが全身を駆けめぐるのを感じ、それを鎮めるためにも、しばらく庭先を歩くことにした。

女の身で政務補佐など、実現するとは思ってもいなかったけれど、いま心身ともに疲れ果てた家定が最後の望みとして、自分の才を高く買ってくれたからには、せめて幕僚会議でそれを検討し、家定との話しあいを持つのが臣としての道ではないかと思うのであった。

篤姫は御台所の心得として「一方聞いて沙汰すんな」の薩摩の諺をいまも心にしめているが、今日の梅野井の話は全面的に信じる気持になってゆくのをどうしようもなかった。

井伊直弼が大老に就任した翌日、篤姫は御座の間で謁見したが、人品骨柄いやしからざる人物と見たものの、ふっと一つ気がかりな言葉があった。

それは、

「掃部頭、現局を乗切るべく身命を賭す覚悟にて、」
という挨拶はよいとしても、
「我が国はまもなく激動の時節を迎えるかと存じますが、上さまにも御台さまにも、お心を安んじておいで遊ばしますよう、願い奉ります」
といういいかたであった。
一見、心強い決意とは聞えるが、篤姫はそのとき何故か、政治は私が司ります、お二方は第一線より退いて傍観していてくださいますように、という含み、いや、もう一歩進んで、お二方を私が押込め奉りましょうか、という威嚇がチラと見えているように感じられた。
慶喜との会見のときは、あまりに投げやりな答故に失望したけれど、このように私がすべて引受け奉ります、という決意も、まかり間違えばおそろしいことだとそのとき感じたものが、いま現実になったのだと篤姫は思った。
人の心というのは思うようにならないもの、親のいいつけだからとて慶喜の印象は好きになれなかったし、慶福に好感は抱いたけれど、それを推挙した井伊直弼に対する憤ろしさは消すべくもないと篤姫は思う。
しかし御台所の地位にあれば自身の好悪をただちに態度にあらわすことはできない故に、気を紛らわせるためにはこうして炎天下の庭先をそぞろ歩きするよりなかった。
後ろから日傘をさしかけている女中とともに従っている唐橋をふりかえって篤姫はふと思いつき、
「如何であろうか。ふたたび猫を飼うてみたいと思うが、」
と問いかけると、唐橋は、
「それならばちょうどお中臈の富永どのの飼猫がただいま懐妊中でございます。生れた仔猫のもらい手を捜しておりますれば、御台さまよりお声がかかりますとどれだけ喜びますことやら」

というのは、唐橋も篤姫のさびしさを察しているからであり、幾島の反対を斥けてまでも、今度こそは生れたばかりの仔猫のなかから身体強健の牝猫を、と口を添えるのであった。

その夜、篤姫は嫁いでのちはじめて唐橋に寝酒の用意を命じた。

井伊直弼への、やるかたない憤懣と、それを訴えるべくもない家定のおわたりの、この頃の絶えて久しいことなど考えていると、城内の催し事のたびに少しずつ口をつける酒の味への誘惑があった。肴はとくに注文をつけ、日頃から大好物の白いんげんの煮たのと、あんかけ豆腐をいいつけた。

大奥での寝酒は少しも珍しいことではなく、女ざかりの身では男禁制の夜を酒に紛らす例は多々あって、唐橋もいそいそと、

「それがようございます。酒など召上りますればお気持も晴れましょう」

とばかり、黒うるしの酒器を運ぶ最中、突然、幾島の入来があった。

お付きの者がお目通り願うのは、先触れがあって御台所の許しを得てからだが、幾島の場合はいつもこれが略されていて、

「今宵は幾島が御台さまのお酒のお相手をば仕ります」

といえば人払いの意味と判っており、唐橋が退いたあと、幾島は篤姫の盃に酒を注ぎながら、

「いつぞや国許で、御台さまは父上よりお盃を受けられましたなあ。あれがお酒の最初ではございませんなんだか」

となつかしそうに口にし、篤姫も心が和んで、

「父上のおん前では懸命でこらえていたが、さがって戻ると部屋中がぐるぐると舞うたことであった」

と一瞬、薩摩の鶴丸城の書院の間を目に浮べた。

幾島は膝を進めて、
「今宵お伺い申上げましたは他でもございませぬ。
幾島も年を取りました故、ここらでお暇を頂かせてもらいとうございます」
といい、篤姫は、突然暇を願い出た幾島の顔を燭台の灯りでつくづくと打ち眺めた。
女丈夫といわれ、その手腕を買われて京都の近衛家から呼び戻されて島津家へ二度の奉公をしたこの忠烈な老女は、ただいま確か六十歳、黒々と染めているものの髪の毛ももはや薄く、目の下、口のまわりにはきっかりと深い皺もみえる。
初対面のとき、篤姫がいたくおそれたあの目の上のこぶは年とともに小さくなり、いまはしぼんで往年のように人を威圧する力は無くなっている。
しかしそのけいけいたる双の眼光は、肉体いささか衰えたりといえども、気力だけはいまだ旺盛なさまを雄弁にもの語っており、そういう様子を改めて見るまでもなく、「年を取りました故お暇を」というのは全くの方便であることが判る。
篤姫には、この六月二十五日、表が継嗣を公表した直後から幾島の行動のこの予感はあり、いまそういわれてのけぞるほど驚かないかわり、胸の底を風が吹き抜けてゆくようにさびしかった。
国許を出て足かけ六年、最初は悉く反発しつづけたひとだったけれど、同じ目的を抱いて力を合せてきていれば、いまはしみじみ、血を分けた母娘に似た感じがある。
それだけに、ここで「何故の暇願いか」などとは聞くだけ野暮で、それを口にすれば幾島も篤姫への非難をせざるを得ないであろうと思った。
篤姫は深くうなずきつつ、湧いてくるさまざまな言葉を抑えて、
「ここより退ってのちは、如何暮すつもりなのじゃ。所存あってのことであろうか」
と聞くと、幾島は、

「所存などあろうはずもございませぬ。罪の身なれば入牢の心づもりにて、どこかで生涯を終えることになろうと考えております」

というはげしい答であった。

終身奉公の奥勤めの女中が退職した場合、実家に戻るのは稀であって、というのは、短い勤めならまだ身内も生きていようが、いく十年勤続の暁には縁故関係者はいなくなっており、また本人も長年の御殿暮しの習慣が身についている故に、賜わった一時金で貸家などを手に入れ、市井の片隅にひっそり暮すのが例であった。

げんに、滝山と並んでこの大奥に権勢を誇った姉小路も、賄賂を受けた嫌疑で退職したあとは、いま市中の伝通院のかたえに侍女ひとり連れて侘住居をしており、昔の朋輩たちがとき折訪ねてゆく話を篤姫は聞いている。

してみると幾島も、実家の黒田藩の縁故を頼ることはせず、自らいうとおり、継嗣問題敗北の責任を取って、この江戸市中で不自由な生活を送るつもりに違いなかった。

篤姫は、酔いも一時にさめる思いがし、盃を下において、

「そのことは、いまここですぐには返答はできぬ」

と止どめ、

「そなたの身分は、現在徳川の家臣ではあっても、お暇願うについては父上のご意向も伺わねばならぬ故、いましばらく間を置くことにいたそう」

と篤姫がいうと、幾島は無理押しはしなかったが再び、

「罪を負うた身がいたずらに禄を食むことはこれ以上許されませぬ。

少くともこの秋の衣更えまでにはご沙汰を出して下さいますよう、願い上げます」

と罪をいい、やがて下っていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com